

脱出

井口昭久

ガラケイから脱出してスマホに替えることにした。

大学の近くの販売店へ入ると、思いのほか混んでいた。

番号札を持って待っていると、中年の男の店員が近づいてきた。「どのような機種をお望みですか？」と、聞かれた。私が左の掌を右手の中指でさすりながら「指先ですやすいとするやつ」と言うと、「全部そうですよ」と教えてくれた。

順番が回ってきてカウンターの前に座ると、相手をしてくれたのは若い女性の研修生だった。「研修生ですので済みません」と先ほど

の店員が横から言った。

「シニアバック、10GB——」などと研修生が喋るのを私は黙って聞いていた。「データプランですが、カケホーダイでいいですか?」「???」「タブレットはどうしますか?」と、言われると「お願いします」と反射的に答えてしまった。「料金が発生します」「いくら?」「7万円ぐらいです」「それじゃ止める」と言おうとしたが、流れに押されてそのままになってしまった。私には「タブレット」の意味が分かっていたいなかった。

「あのー、あんしんバック、おすすめバック、カラダキモチは無料です」「???」

「お支払いプランですが、最初の1カ月はタダですが、そのあとは料金がハッセイします。中止するにはオコトワリの電話を入れて頂くことになります」そのバックに加入すると最初の1カ月は只だが、その後は金が必要ということらしかった。そこで「最初から入らないようにしてください」というと「それができないんです」と研修生が答えた。

私には不要であると思われるサービスが次々に追加されていった。

時間は1時間半ほど経っていた。
料金支払いの方法に話が進んだ。

「自動車の免許証とかがって持っていますか?」「持っています」「コピーとかがってやってよろしいでしょうか?」

そこからは研修生が女性社員に替わった。

「今の携帯の引き落としの銀行口座を教えてください。」

私はカードを見せた。店員がカードを持って奥に行って操作をしてから戻ってきた。

「先月の料金が引き落とせていないようです」「どうして?」「私どもでは分かりかねます」

私は不安になった。「何で?」としつこく聞くと、「例えばコーザにお金がないとか」

私は口座に金が残っていることを確かめなければいけないと思い始めた。あの大金が盗まれてしまったか?

「あのー、先ほどの暗証番号ですが——」そんなことはどうでもよくなった。

「早く終わりにしてー!」と言うと、様々なものを紙袋に入れて持たされた。その中でひととき大きな機械がタブレットであった。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)

